

(面白い…本当に逆すり鉢なんだ。高い所のステージ見上げても、前が邪魔にならないようになってる。空間の使い方リッチだなあ…どんな音の響き方するのか早く聴いてみたい…)

織姫学園長に聞かされていた通り、ワイヤーフレームの図面データでは想起できない構成に驚く。

キョロキョロと周囲を見回す吾華音に、よく響く男性の声がかかった。

「召苗、吾華音様ですか」

つとめて自然な笑顔で、声の方に体を向ける吾華音。目の前の、痩せ型で背が高い、初老の男性の顔を見て口を開く。

「はい。ASDCのステージコーディネーターの召苗と申します、はじめまして。オーナーの小野田様でいらっしゃいますか？」

丁寧なお辞儀とともに、用意してあった名刺を差し出す。

「これはご丁寧に。当店支配人の小野田です。失礼、あれこれ立て込んでおまして、こちらの名刺は後程…お話は光石様と涼川様から」

「いえ、御多忙中恐れ入ります」

名刺を胸ポケットに入れるのを確認する。そこで、支配人が何かに気付く仕草。

「おっと…ステージパスをお出ししなくては。少々お待ちください」

低出力トランシーバーのマイクに何か呟いている。吾華音は左手で伊達眼鏡を直す仕草。

(ああ、やっぱりか…)

眼鏡の内側に発信内容がテキスト表示される。

『例の客人だ、おもてなしの準備を』

(しっかり待ち伏せかけといて、名刺切らしてるとか露骨ー。でもやりやすくいいな)

吾華音の中で『プランA(いつも通り)』のスイッチが入る。

「では、こちらへどうぞ。コントロールルームにご案内します」

手で招かれる側に続く吾華音。支配人はゆっくりと足を進める。自然な所作のまま、吾華音は通路の影を見て小さく頷いた。スタンドの花が小さく揺れる。その音を隠すように会話を切り出した。

「凄い、カウンター裏にちゃんとした厨房があるんですね」

「はい、当店はパーティ用途でも貸し出ししておりますので。料理の質には自信がございます、是非ご賞味下さい」

「それは楽しみです、仕事を急がなければ小野田さんの期待に添えないですね」

返答がやや遅れた。

「またの機会でも、お料理はそれはもうしっかりとご用意させていただきますよ。ライブの妨げにならない程度で、ごゆっくりどうぞ」

こうも歓迎されていないと判ると、逆に笑いが込み上げる。必死で押さえ込む。会場に着いてから今まで、機材のリハが行われている様子もなければ、演出用の照明がテストされた気配もない。戸内消費電力が小さすぎるし、電波はLTEとトランシーバーのそれしか飛んでいない。

となると、奥の部屋で何が起こるか察しがつく。そんな事を考えていると、伊達眼鏡の視界の端で緑のシグナルが点滅した。少し口角を上げ、足を止める吾華音。

「…失礼ですが、早速仕事を始めさせていただきますね」

「コントロールルームはこの先ですが」

支配人が言うや、その先の扉が開き、スタッフが慌てて駆け寄ってくる。異変に気づき小走りで進む支配人を尻目に、吾華音は左手を眼鏡に添えて、右手指を空間上で素早く動かした。

「ブートシーケンスOK…ってええ？起動履歴って本当に『あの時』つきりなの！？よく一発で起きてくれたね、いい子…」

薄笑みを浮かべ呟く吾華音に、支配人…小野田が狼狽気味に言う。

「待ちたまえ…待て！今日はこれからライブな事くらい承知だろう！ヒメさんの紹介でも…！」

「素に戻ってますよ。協力して頂けそうになかったのも…大丈夫、お時間は取らせませんので。月末でリプレースされるアイカツシステムに、最後にご挨拶がてらお話を伺うだけですから」

「やめろ！」

小野田の手が吾華音の眼鏡に伸びる。瞬間、吾華音が呟いた。

「新」

「うん！」

2人の間に割って入る新。小野田の手をふわりと捕まえる。力を加えられている様子もない、柔らかく包まれるような感覚のまま、小野田の体が止まった。気配どころか姿にさえ気づかなかった新の技に、小野田の額から汗が伝う。

「ごめんなさい、お姉ちゃんに少しだけ時間を下さい」

自分の目を見据え、申し訳なさそうに微笑む少女。小野田にはその瞳が

金色に輝いたように見えた。強い神秘性を受ける感覚とうらはらに、伝わるのは大きな地震のような、あるいは激しい光と同時に轟く雷鳴のような、不可避の圧迫感。考えの乱れが場に浸透していく。何か言おうと小野田の口が少し動いているが、声ひとつ出ない。その後ろのスタッフも、気圧されたように動きを止めている。

数秒、建屋内の照明が消えた。すぐに復旧する。

「ダメダメ、そういうので止まらないようにずーっと前からできてるんだから…」

ブレーカーを落とされても、ここのUPSは耐える。ステージを眺めていた時にチェック済みだった。クローズドネットワークで外部から弄れないシステムも、中に入ればどうとでもなる。筈だった。

「見つけた。ってこれ…！」

「随分強引なのね。そういうの大好き♪」

「…！？」

吾華音が目的のステージプログラムの取り込みと展開を済ませ、オーバービューを見た瞬間、後ろからの女性の声と共にシステムがシャットダウンシーケンスに移った。クラッキングをバックドアで抑止。そんなことができるのはただひとり。

ライブラリ、そしてステージプログラム全体を構築し、最後のステージ…吾華音の端末上で再現され、その瞳にはっきり投影され続けている『マスカレード解散発表会』をプロデュースした、追いかけ続けた影。全てを悟った吾華音。小さい声で「新、もういいよ」と。

優しい笑みに変わり、小さくお辞儀をして後ろに退く新。技を外れた面々の胸に訪れる、安堵や安心を超える優しい感覚。小野田はその不思議な経験に、つい先程の抑止さえも含め、感動の笑みを新に投げかけた。

ハンカチで汗を拭くと、吾華音の後ろに立つ女性の姿を見て小さく頷く。

「ごめんなさい小野田さん。貴方の大切な思い出を無理矢理こじ開けて」

「いえ…たった今貴方は許可を得ました。理由があったとはいえお客様の業務を妨げようとしたのは事実です、こちらこそお詫びを…」

「伊助さん、そこは私の我儘だから、謝る必要ないですよ」

支配人をファーストネームで呼んだその人は。

「涼川さん、いえ…夢咲さん」

気の所為か、吾華音の目には後ろの人物の名を呼ぶ支配人が少しだけ若返ったように見えた。

同時に、さまざまな想いを封じ込めたのであろう場所に、土足で上がり込んだ自分を恥じる。振り返り、

「…すみませんでした、私…」

吾華音が深々と頭を下げる。ぽつぽつと、床に水滴。察した新が、奥のスタッフ達にお詫びを言いに離れた。予想外の歓迎に戸惑う新の声が響く。そして、

『その人』は、やや楽しげに吾華音に声をかけた。

「ちゃんと見えてる？セットのオーバービュー」

「はい…」

「ふふ、期待通り。故障でシステムが死にかけた時、そのサルベージの腕、大事だよ。忘れないで。よし！合格！頑張ったね、吾華音ちゃん…いえ、吾華音」

思わず涙顔のまま顔を上げる。

初めてティアラ代表※に敬称なしで呼ばれた。(※ASDCの立場による)

「ちゃんと見てたよ。ずっと。あなたがスターライトの学生だった頃から」

「えっ…」

「黙っててごめんなさい。スターライトに居る旧知からね、聞かされたの。とびきりの新人がいて、どうもアイドルじゃなくて私の畑に行きそうだって」

「弟さん…ですか？」

ちょっとだけニヤリとしたティアラ代表の顔を見て、途端に真っ赤になる吾華音。その顔にますます笑顔になりつつ続けるティアラ代表。

「ハズレ。もっと前からの貴方の仕事仲間。ジョニー先生。織姫学園長に内緒で、ステージデータ入力をラボで見せてもらった事があるの。初等部の頃だっけ？」

「ええっ！？そんなに前ですか？私、まだただの生徒で…」

「…ジョニー先生そういうところは昔っからだなあ…」

やや呆れ口調。

赤くなったままの吾華音の顔がますます赤くなっていく。

「それで、私をご存知の通り会社売却してドリアカ設立準備してたから、自分でコード書く事も減ったんだけど。程なくあれこれの引用申請やバージョンアップ申請がスタライから来て。名前を見たらあなただった」

「人真似しかできなかった頃で…お恥ずかしいです」

「いいえ、凄いことだったのよ？勿論自分でも知ってるでしょうけど、本当にあれこれ最年少記録なんだから。うちのきいに記録破ってもらおうと思ったら、そもそもうちの入学可能年齢より若くて無理だったわ」

「ああいや…本当に立場的というか必要に迫られてというか…」

吾華音の言葉でスイッチが入ったかのように、ティアラ代表が切り出す。

「そう。それなの。吾華音、あなたはちゃんとアイドルとしての資質を持ったアイカツシステムのコーダーという点が武器。それは今でも変わらない。コンソーシアムにそういうメンバー他にも少しいるけど、皆アイドル引退後に来たでしょう？」

「でも私、外でアイカツしてませんでしたから」

「あなたでなくても、あなたの影をなぞった子は沢山ステージに立った。『あの二つ名』知ってるよ」

これ以上持ち上げたら吾華音の頭が破裂するんじゃないか、と側で聞いていた新が心配になってきた頃。

「あら？吾華音、泣いてた？レアショット逃した…」(ロシア語で)

「アカネ泣かすとか学園長すごいね！ね！」(ロシア語で)

アンジェリカとアリーシャがやってきた。それに気がついたティアラ代表…学園長、話を締めを持っていく。

「そういうわけで、実は来月のここのステージは、私が仕込んだフェイクオーダーでしたー！」

『ええー！！！！』

アリーシャ以外の全員、小野田支配人までが驚いている。

「結論を言うと、そろそろちゃんと『後継者』って呼んであげたくて。エンジニアとしてはもう隠居のご意見番、今の私はアイドル学校の学園長。それに…」

ティアラ代表がポケットから取り出したメモリを吾華音の眼鏡のフレー

ムにかざす。瞬間、吾華音の視界に完成ライブラリやソース一式の転送通知が広がる。最後に『Congratulations!』の言葉とクラッカーがはじける演出。微笑んで続ける。

「吾華音が色んなことできる子だって知ってるから、ヒメさんには悪いけど私も動いておかないとって。だから…ヒメさんがどう動くか気になったから、そのお伺いも兼ねて私が此処まで登って来るきっかけになった『伝説』に触れてもらうことにしたの。さっきお電話貰ったわ、高くつくわよ？って笑ってた。昔みたいに」

ゆっくり瞳を閉じて、上を向くティアラ代表。その姿に、少なくとも吾華音の瞳には、あの伝説を支えた、バックステージに輝く星が重なった。姿も知らぬまま追いかけた、憧れの対象が今、そこにいる。

(そうか…これが…)

「私の道標…」

よく知る歌の一節が吾華音の口をつく。それは小さく、誰の耳にも届かなかった。

「ん？何か言った？」

視線を戻したティアラ代表が尋ねる。

「い、いえ！そんなに褒められるような…特に今日の手口は、とてもとても褒められたものじゃ…」

慌てたジェスチャーの後、視線を逸らす吾華音。しかし。

「そんな事を気にしていたの？…ヒメさんが言うのと印象違うわね…まあいいの、それは。手口が荒っぽいのはわかってたから、あれで評価が

どうこうはないわ。私と同じじゃ意味がないもの、あなたはあなたらしく。新ちゃんもかっこよかったわよ」

横で聞いていた新が、はにかんで小さくこうべを垂れた。吾華音の視線がティアラ代表の瞳に戻る。

「嬉しいんですが…喜んでいいんでしょうか」

「喜んでもらえないと私が悲しいわよ？」

とびきり嬉しそうな笑顔でティアラ代表が言った。

「…ありがとうございます！」

眼鏡を外し、涙を拭って、吾華音は満面の笑みで答えた。

…

ややあって。

「今日は私の久々の箱ライブ、ようこそお越し下さいました！美味しい食事や飲み物のおつまみに、私の歌を聴いて頂ければ嬉しいです…って、一番奥のテーブル、もう出来上がりすぎー」

花音のMCに会場から笑いが。悪戯な微笑みがステージから涼川直人に向けられている。

「ちょっ、姉貴、少し静かに…」

「大丈夫よ～、ここの音響、後ろの音が聴こえにくいように設計されてるから～」

「しまった…誘ってくれたからお酒強いと思っちゃった…ごめんね涼川君」

「いえ、アンジェリカさんは悪くないっすから…まあ、嬉しかったんで

すかね。ありがとな、召苗」

小さく微笑む涼川に、ちょっと照れる吾華音。

「私こそ。久し振りに自分が誇らしいです」

笑顔で言う吾華音のスマートフォンには、ASDCのアンリミテッドオペレーターを示すウォーターマークが。次に職場に出向いた時は、年配組も隠し事はしないだろう。

「あれ、ヤバイ。美味しいりんごサイダーだなーって思って飲んでたけど、これアルコールじゃん。気づかなかった…アカネ、どうしよう」

ラベルには確かにアップルサイダーと書かれている。しかし、アルコールの度数がビールより高く表記されている。新なら香りで気付くところなのだが…

「ええ？何やってんのアーヤ！困ったなあ…」

「全然酔ってないし外交官ナンバーだから捕まりようがない？アーヤだし」

珍しくアリーシャが怒る。ただし自分の失敗を棚に上げて。

「アン姉さんヒドイ！主に最後が！それに飲酒運転ダメ！ゼツタイ！ロシアでもダメ！」

「アーヤが日本語で正論言ってる…酔ってない？」

「お姉ちゃん、アリサちゃんがかawaiiそうだよ…」

と言いつつ、新も若干呆れ顔だ。

「俺がスタライまで召苗の車回そう。星宮たちもいるからタクシーでもいいんだけどな、確実に使える足の方がいいだろ」

「えっ、涼川先生、中座されるって」

「召苗はその中座の理由をアリサさんの車で送ってくれ、悪い」

涼川がため息混じりにティアラ代表に目をやる。吾華音は思わず苦笑い。

「そういうことでしたか…はは…」

「よし！まだイケる！」

「残りはノンアルにしてくれ、頼むから」

突然目を輝かせた涼川姉を、涼川弟がゲンナリ顔でたしなめた。

…

その頃。

「花音さんやっぱり素敵だね！」

「ああ」

「なんかすごく穏やかだわ…」

感慨深げなソレイユの3人のテーブルに、曲の合間に料理が届く。

「あれ、誰かオーダーした？」

霧矢の問いに2人が首を横に。ウェイターがこれを、と何か書かれた紙ナプキンを紫吹に手渡した。

「なになに？蘭」

「えっと…ああ、新だ。『なんだか凄い料理をお店の皆さんが私に、って振舞ってくれたので、アンジェリカさんがオーダーした分消費するの手伝って下さい』だっけさ」

「やった！新ちゃんありがとー！」

星宮が後ろを向いてぶんぶん手を振る。気づいた新が手を振り返しているのが見えた。

「何があったのかしら…穏やかじゃない気配が…」

「あほへひへはいいはらはやふはへよ？」

「いちご、食うか喋るかどっちか、な」

そうこうしているうちに、次の演奏を告げるMCが響いた。

「ま、いっか」

霧矢の弦きとともに、3人は身体をあらためてステージの方へ。おもむろにポテトフライをつまんだ2人の口から「美味しい！」の言葉が漏れた。

「お気に召してよかった！ソレイユのみんな、楽しんでね」

すかさずステージから笑顔と共に花音のMCが飛ぶ。遅れてスポットライト。不意打ちの振りからの歓声に、余裕の笑顔で手を振る3人。ライトが外れるや…

『びっくりしたー』

と声を揃え、顔を見合わせることしばし、笑い転げる。
イントロを聴きながらステージに目を向ける3人に、花音が微笑んだ。

数曲のステージの後、スタッフから3人へ準備を乞う声が。

「よおーっし、ふたりとも『輝く準備はできてる？』」

「おっ、いいのかいちご。後でマネしてたって美月さんに言うぞ」

「いいよ♪フフツヒ♪」

「いちご、いえ、星宮さん」

「なあに？あらたまって」

「...今のもう一回お願い」

「あおい、ヨダレヨダレ」

アイカツフォンのカメラを向けて目を輝かせる霧矢に、すかさず紫吹がツッコミを入れた。